

科目名

日本の文学Ⅱ

Japanese Literature Ⅱ

1年 後期 2単位 選択

原田 榮作

概要

明治以降洪水のように流入してきた西洋の思想や文化の強い影響のもと、小説は言うまでもなく近代詩や近代短歌、近代俳句など、我が国の文学は急速に進展をとげた。江戸時代の儒学を中心とする武士階級の教養全般をさす近世的概念から、言語芸術の総称としての近代的概念に移行したのである。その後、大正ロマンの時代を経て昭和戦後の現代文学に至るまで多くの詩人、歌人、俳人が誕生し、文学作品が生まれた。加えて、学校教育と活版印刷およびマスコミの発達が生者の飛躍的な拡大に拍車を駆けることになった。これらを概観することにより日本人の思想の変遷をたどりながら近代日本文学の特徴を理解する。

また、副次的に、日本語の基礎学力を養成するために、詩歌の創作、詩歌の鑑賞文、語彙力の向上を図る。

目標

- ① 近代日本文学の中の代表的な作家の代表的な詩、短歌、俳句を読み、その特徴や日本人の心の美しさを理解する。
- ② 詩歌の創作、詩歌の鑑賞文の書き方の基礎を養成する。
- ③ 「日本の文学Ⅰ」に引き続いて、反意語や敬語、外来語、日本文学史などの基礎力を養成する。

授業計画

- 第1回・第2回 後期講義内容の説明
詩のおこりについて
島崎藤村の詩を鑑賞する・「潮音」「千曲川旅情の歌」「椰子の実」「初恋」
- 第3回・第4回 高村光太郎の詩を鑑賞する・「冬が来た」「道程」「智恵子抄」等
- 第5回 室生犀星の詩を鑑賞する・「小景異情」「せつなき思ひぞしる」「蟬頃」
- 第6回 与謝野晶子の詩歌を鑑賞する・「君死にたまふことなかれ」「敗荷」
- 第7回 北原白秋の詩歌を鑑賞する・「落葉松」「糸車」「城ヶ島の雨」
- 第8回・第9回 金子みすずの詩を鑑賞する・「私と小鳥と鈴と」「星とたんぽぽ」「このみち」
- 第10回 石川啄木の詩歌を鑑賞する・「一握の砂」「悲しき玩具」
- 第11回 若山牧水・与謝野晶子の短歌を鑑賞する・「海の声」「みだれ髪」
- 第12回 斎藤茂吉の短歌を鑑賞する・「赤光」「あらたま」
- 第13回 俵万智の現代短歌を鑑賞する・「サラダ記念日」「チョコレート革命」
- 第14回 正岡子規の短歌・俳句を鑑賞する・「竹乃里歌」「寒山落木」
毎回、「日本語の力をつけましょう」の確認テストを実施する
- 第15回 定期試験。

授業方法

講義：自作の教材を使う。プロジェクターを使って各種関係資料を提示する。
適宜に10分間の鑑賞文を書かせて提出させる。
毎時間、自作教材の「日本語の力をつけましょう」の範囲を限定して確認テストを実施する。

学習到達度の評価

- ① 授業中に教員より質問して、理解度を促す。
- ② 可能な限り、学生の方からも積極的に質問するように促す。
- ③ 学生が書いた鑑賞文や創作した作品の中から優秀なものを公表する。

評価方法

定期試験（50点）、毎回の確認テストと鑑賞文（50点）、合計100点。60点に満たないものは再考査をする。

教材

自作の教科書、プリント教材を使用する。

履修上の注意

上記作品を図書館の本を利用するか、各自で文庫本を購入するかして必ず読む。

科 目 名

日本の文学Ⅱ

Japanese Literature Ⅱ

1年 後期 2単位 選択

坂 口 頼 孝

概 要

歌人として、また多くの古典を書きし今日に伝えた功績で知られる藤原定家。その定家の書いた短い歌論書（短歌の作り方を述べたもの）がある。そこにお手本として103首の短歌が載っている。その中から春・夏・秋・冬・哀傷を歌い、内容的に魅力があり、語法的・修辭的にも重要と思われるものを順次取り上げる。

日本の文学Ⅰでは変体仮名が読めるようになることに主眼を置くが、Ⅱでは読んだ後の処理である仮名遣いの異同の指摘・漢字仮名混じり表記・品詞分解・口語訳、さらには感想あるいは鑑賞文作成に主眼を置く。

目 標

何も見ないで変体仮名が読めるようになること。進んで、仮名遣いの異同の指摘・漢字かな混じり表記・品詞分解・口語訳・感想あるいは鑑賞文の作成が自分のできるようになること。

授業計画

第1回

授業の目的・やり方を確認する。新受講生（日本の文学Ⅰ未履修）がいた場合は古典の読み方や平仮名・片仮名の成り立ち・字源について触れる。その後1首目（12ページ）の歌の字源を確認する。「かな字典」は使わず、漢字で書いてある所も前後の文脈から類推させる（新受講生を除く）。

第2回

1首目（12ページ）の仮名遣いの異同の指摘・漢字仮名混じり表記・品詞分解・口語訳・感想あるいは鑑賞文を完成させる。

第3回

2首目（15ページ）の字源・平仮名表記・仮名遣いの異同の指摘・漢字仮名混じり表記・品詞分解・口語訳・感想あるいは鑑賞文を完成させる。

第4回～第10回

3首目（16ページ）・4首目（16ページ）・5首目（17ページ）・6首目（18ページ）・7首目（23ページ）・8首目（24ページ）・9首目（27ページ）において上記の作業をさせる。

第11回

10首目（27ページ）において上記の作業をさせる。必要に応じ冬休みの宿題を課す。

第12回

冬休みの宿題があれば回収し、チェックする。その間11首目（31ページ）において上記の作業をさせる。その後冬休みの宿題の正解を教室後方に6枚ほど置き、名簿順に答え合わせをさせる。各自答案訂正の上提出するよう伝える。

第13回

11首目の作業を完成させ、解説する。

第14回：練習

定期試験の模擬試験（練習問題）を配る。本番と同じ形式で行う。机間巡視し、出来の良くない学生に対し、奮起を促す。

第15回：定期試験

授業方法

毎回教員が1首を指示し、受講生は

1. それ（変体仮名）を読む（元の漢字に直す）。
2. 全て平仮名にし、歴史的仮名遣いと異なるものを訂正する。
3. 漢字仮名交じりに直す。
4. 品詞分解をすると共に歌の修辭を指摘する。
5. 口語訳を考える。
6. 感想文または鑑賞文を書く。

の作業を行う。この間教員が適宜アドバイスを与える。

評価方法

定期試験（100点満点・筆記）。60点に満たなければ再試験（1回のみ）を実施する。定期試験・再試験は古語辞典（電子辞書）と文法書のみ持込可。時間は60分。

教 材

教科書：百人一首（堯孝筆）笠間書院（1,000円）…必要
字典かな 笠間書院（390円）…あれば、持って来る。

履修上の注意

古語辞典（電子辞書の場合、活用表が付いていないものは別に文法書が必要）とノートを必ず持って来ること。ノートは過去の分も持って来ること。